

中国語結果構文と非対格性

—英語・日本語結果構文との比較を通じて—

崔 玉花

キーワード：結果述語、直接目的語制約、非対格仮説、ゼロ代名詞

1. はじめに

結果構文は、(1)のように、動詞が表す行為の結果として何らかの状態変化が生じることを表す文のことをいう。英語と日本語の結果構文は、それぞれS-V-O-CとS-O-C-Vの形式によって示され、それに対応する中国語では、前項要素で行為を表し、後項要素でその結果を表す複合動詞¹の形式が用いられる。

- (1) a. She tinted *her hair red*.
b. 彼女は髪を赤く染めた。
c. 她染红了头发。

結果構文には、ある状態変化をしたものの結果状態を叙述する、本動詞以外の述語があり、その述語を結果二次述語(resultative secondary predicate：結果述語)と呼ぶ。(1)では、下線を引いた結果述語“red/赤く/红”がイタリックで示した名詞句“her hair/髪/头发”と二次的な叙述関係を構成する。

結果構文の研究において活発に議論されてきた論点のひとつに、結果述語とそれに叙述される要素との構造的関係に関する問題がある。従来、この問題は主に非対格性との関連で議論が行われ、これまでに結果述語の叙述対象は基本的にD構造の直接目的語に限られるという「直接目的語制約(Direct Object Restriction(以後DOR)：Simpson(1983), Levin&Rappaport Hovav(1995),etc.)²」が提案され、広く支持されてきた。しかし、中国語には表

¹ “染红(染める-赤い)”における後項要素“红(赤い)”は他の言語では形容詞に分類されえる形態素であるが、中国語では形容詞を状態動詞と区別することが難しく、これを動詞と動詞の結合と見なす研究者が多い。本稿も先行研究に従い、中国語結果構文を複合動詞の形式をもつ構文と見なし、議論を進める。

² 統語論ではDORが相互c-統御或いは相互m-統御という構造的条件で捉えられている(Carrier&Randall(1992) Takezawa(1993))。しかし最近ではDORの妥当性を否定する研究もあり、Rappaport Hovav& Levin(2001)は、DORの代わりに事象構造(event structure)に基づく分析を提出している。英語においてDORの反例と指摘されているのは、主に主語の位置変化を表す文であるが、このような文を結果構文と区別して移動構文と分析し、またこのような文に生起する動詞を非対格動詞と見なし、DORの反例でないとする研究もある。詳細は加賀(2007)を参照。本稿は、DORが状態変化を表す結果述語の叙述対象の間

面上主語叙述を許す現象が存在することが指摘されており、特にDORの観点から注目されてきたのは、表面上主語叙述を許す非能格動詞を含む結果構文である。

本稿では、一見DORの反例と思われる中国語の非能格動詞を含む結果構文を英語・日本語の結果構文との比較を通じて考察し、このタイプの結果構文が中国語で許されるのは、非能格動詞が結果述語と結びつく場合、非能格動詞と非対格動詞の両方の性質をもつことに起因し、DORの反例にならないことを主張する。

2. 問題の所在

本節ではまず、DORの観点から日中英結果構文を考察し、中国語には一見DORの反例と思われる現象が存在することを指摘する。次に、これらの現象をDORの観点から論じている先行研究を概観し、本稿の立場を明らかにする。

2.1 DORの観点からの現象の観察

DORは、「結果述語の叙述対象がD構造の直接目的語に限られる」という結果述語の指向性に関する制約である。この制約は、もともと英語の結果構文に関してSimpson(1983)が提出した記述の一般化に端を発するものであるが、結果構文の多言語比較が盛んになるにつれ、その通言語学的な妥当性が問われるようになってきた。以下では、DORの観点から日本語・中国語結果構文を考察し、日本語では英語と同様、DORが一般的制約としてはたらいっているのに対し、中国語ではDORによる説明が可能になる一方で、一見DORの反例と思われる現象が存在することを示す。

まず、DORによると、他動詞を含む結果構文においては、主語の状態を叙述する結果構文はありえないという予測になる。

- (2) a. She polished *the shoes shiny clean*. (他動詞)
b. 彼女は革靴をぴかぴかに磨いた。
c. 她擦亮了皮鞋。
- (3) a. * She polished the family's shoes *exhausted*. (他動詞)
b. *彼女は家族全員の靴をクタクタに磨いた。
c. *她擦累了全家人的鞋。

(2)と(3)は、日本語・中国語も英語と同様、「革靴を磨く」という行為によって「革靴がピカピカになる」といった目的語の状態変化を表す結果構文は成立するのに対し、「彼女自身がクタクタになる」といった主語の状態変化を表す結果構文は成立しないことを示している。「靴を磨いてクタクタになる」ということは、現実世界で起こりえることであるが、こ

題を捉える一般化としては妥当であるという前提で議論を進める。

のような事態を結果構文の形式で表せないのは、DORの効果³であると言える。

次に、自動詞の場合を見てみよう。英語と日本語では以下で示すように、同じく表面的に直接目的語が存在しないにも関わらず、非対格動詞と非能格動詞を含む結果構文では異なる文法性を示す。こうした事実から、結果構文は非対格仮説(unaccusative hypothesis: Burzio(1986),etc.)の妥当性を示す証拠であり、DORはそれを支える分析であることが指摘されている(Levin&Rappaport Hovav(1995)(以後L&TH), Takezawa(1993)etc.)。

- (4) a. *The ice cream froze solid.* (非対格動詞)
b. アイスクリームがカチカチに凍った。
c. 冰淇淋冻硬了。
- (5) a. **He ran tired.* (非能格動詞)
b. *彼はクタクタに走った⁴。
c. 他跑累了。
- (6) a. 非対格文 NP_i [vp t_i V]
b. 非能格文 NP [vp V]

非対格性というのは、(6)で示したように、伝統的に自動詞と呼ばれるものが大きく非能格動詞と非対格動詞という二つに分類され、それぞれの主語が統語的に異なる働きをもつという考え方である。この仮説によれば、非対格動詞の主語は、非能格動詞や他動詞の主語(外項)と異なり、最初の段階(D構造)では目的語位置にあるが、S構造に至る派生の過程で主語位置へ名詞句移動された内項と考えられる。したがって、DORを基底構造に関する一般化と見なすなら非対格動詞を含む(4)において、結果述語が叙述しているのはあくまでも目的語位置に基底生成された派生主語であるため、DORにより適格文になっていると言える。一方、非能格動詞を含む(5a,b)では、結果述語が叙述しているのはD構造の段階から主語位置に基底生成された名詞句であるため、DORにより、非文になっていると言える。

しかし、中国語では(5c)で示したように、英語・日本語と異なり、非能格動詞の場合にも主語叙述が可能となり、見かけ上DORに対する反例のように振舞う。次に挙げる例文においても、中国語の非能格動詞を含む結果構文は、表面上結果述語が主語を叙述する非対格動詞のパターンと同様の形式をもっている。

- (7) a. 张三醉倒了。 (非対格動詞)
'张三が酔って倒れた'

³ 中国語では「他吃饱了饭了(彼がご飯を食べてお腹いっぱいになった)」のように、主語叙述を許す現象が幾つか存在している。これらの現象とDORとの関連については崔(2006)を参照のこと。

⁴ 日本語では「走り疲れる」という複合動詞が対応されることもあるが、多くの先行研究では「連用修飾要素+動詞」形式を英語の結果構文との比較対照とするため、本稿もそれに従う。

- b. 张三哭醒了。 (非能格動詞)

‘張三が泣いて目が覚めた’

このように、英語と日本語では主語の状態を叙述する非能格動詞を含む文がDORにより排除されるのに対し、中国語では適格文となる。

2.2 先行研究

先行研究では、表面上主語叙述を許す(5c)(7b)のような結果構文をDORの反例と見なす立場(Cheng&Huang(1994))と反例と見なさない立場(Sybesma(1999), Huang(2006))との間で議論が分かれている。DORの反例と見なさない立場では、具体的な分析方法は異なるものの、いずれもこのタイプの結果構文に結果述語が派生主語と叙述関係を結ぶ非対格の構造を仮定し、中国語では非能格動詞が主語の状態を表す結果述語と結びつく場合、非対格動詞にシフトされるとする。Sybesma(1999)とHuang(2006)は、(8)のような結果構文にそれぞれ(9)と(10)のような構造を仮定している。

- (8) a. 她哭湿了手帕。

‘彼女が泣いてハンカチが濡れた’

- b. 张三哭累了。

‘張三が泣いて疲れた’

- c. 张三醉倒了。

((7a)の再掲)

- (9) Sybesma(1999)

a. 他動詞結果構文: NP [vp V [sc NP XP] (=8a)

b. 自動詞結果構文: e [vp V [sc NP XP] (=8b),(8c)

- (10) Huang(2006)

a. Causing with a manner: [x CAUSE<V1>[BECOME[y<V2>]]] (=8a)

b. Inchoative: [BECOME<V1(Unaccusative/Unergative)> [x <V2>]] (=8b),(8c)

中国語結果構文に結果述語とそれが叙述する名詞句が一つの節を形成する小節(small clause)の構造を仮定しているSybesma(1999)の枠組では、表面上目的語を伴わない結果構文が一律に(9b)で示したような非対格の構造をもつと分析されているため、(9b)のようなV1が非能格動詞の場合の結果構文も、必ずDORに従うことになる。Huang(2006)は、中国語結果構文にV1が様態付加詞(manner adjunct)⁵として、使役を表すCAUSEや起動を表すBECOMEなどの意味述語に併合(merger)される(10)のような事象構造を仮定し、この

⁵ V1を付加詞と見なすHuang(2006)によれば、中国語の結果複合動詞の主要部はV2ということになる。一方、Li(1990), Cheng&Huang(2004)は、V1を主要部と見なす。結果複合動詞の主要部の認定を巡っては議論の分かれるところであるが、本稿では、V1を主動詞と見なし、議論を進める。

ような事象構造はそのまま統語構造に反映されるとする。(10b)は、V1がBECOMEに併合される非対格構文であるが、Huangの枠組では、非能格動詞もBECOMEへの併合が可能⁶であると見なされているため、Sybesmaの場合と同様、(8b)のような結果構文は必ずDORに従うことになる。

2.3 本稿の立場

本稿も、表面上主語叙述を許す非能格動詞を含む結果構文は、DORに対する真の反例にならないと考えている。しかし、このタイプの結果構文に非対格構文の分析を仮定している先行研究と異なり、本稿では、V1が非能格動詞の場合の結果構文には、以下のような二つの構文分析が可能であり、非能格動詞が結果述語と結びつく場合、非対格動詞の性質だけでなく、非能格動詞の性質も持っており、両方の可能性があることを主張する。

- (11) a. e V1-V2 NP (非対格文)
b. NP_i V1-V2 e_i (他動詞文)

本稿では以下の要領で議論を進め、表面上主語叙述を許す非能格動詞を含む結果構文がDORの反例にならないことを示す。まず、非能格動詞が結果述語と結びつく場合、非対格動詞の特性を持つことを、非対格性のテストを用いて検証し、結果述語が派生主語と叙述関係を結んでいる(11a)のような分析が妥当であることを示す(3節)。次に、非能格動詞が結果述語と結びつく場合も非能格動詞の性質をもつことを、見せかけの目的語の生起と関連する事実に基づいて示し、この場合の結果構文は、(11b)で示すように、結果述語が目的語の位置にあるゼロ代名詞と叙述関係を結んでいる他動詞結果構文であり、DORの反例にならないことを主張する(4節)。最後に本稿の議論をまとめる(5節)。

3. 結果述語と非対格性

本節では、非能格動詞が結果述語と結びつく場合、非対格動詞の特性をもつことを非対格性のテストを用いて検証し、(11a)のような分析が妥当であることを示す。

3.1 不定主語の動詞後置可能性

非対格性を示す現象として、「不定主語の動詞後置可能性」が挙げられる(Huang(1987), 楊(1999), 徐(2001))。これは同じく自動詞であっても非対格動詞の主語は動詞に後置し、目的語の位置に現れることができるが、非能格動詞の場合は不可能となる以下のような事実に基づいている。

⁶ Huang(2006)は、英語では非能格動詞のBECOMEへの併合が不可能であるため、(5a)のような結果構文が成立しないとする。そしてBECOMEへの併合可否に見られる英語と中国語の違いは、語彙化パラメータ(Lexicalization Parameter)に還元できるとする。詳細はHuang(2006)を参照。

- (12) a. {一个人/ 那个人} 死了。
 b. 死了 {一个人 / *那个人}。
 ‘(人が一人/あの人)が 死んだ。’
- (13) a. {一个人/ 那个人} 哭了。
 b. *哭了 {一个人/ 那个人}。
 ‘(人が一人/あの人)が 泣いた。’

(12b)(13b)は、不定の主語“一个人(一人の人)”が非対格動詞“死(死ぬ)”の場合は目的語の位置に現れることができるが、非能格動詞“哭(泣く)”の場合は不可能であることを示している。つまり、この対立は、目的語の位置に基底生成された非対格動詞の主語のみ、S構造でも目的語の位置に現れえることを示している。ここから「不定主語の動詞後置可能性」は、表層の非対格性(surface unaccusativity)を反映した現象としてしばしば取り上げられている。

しかし面白いことに、非能格動詞が結果述語と結びつく場合、(14)で示すように、表面上の主語は目的語の位置に現れることができる。

- (14) a. *哭了不少人
 ‘多くの人が泣いた。’
 b. 哭累了不少人。 -Sybema(1999: 43)
 ‘多くの人が泣きつかれた。’
- (15) a. 醉了好几个人。 (非対格動詞)
 ‘多くの人が酔った。’
 b. (那个晚会上)醉倒了好几个人。 -Sybesma(1999:43)
 ‘(あのパーティーで)何人かの人が酔って倒れた。’

(14b)は非能格動詞“哭(泣く)”が結果述語“累(疲れる)”と結びつく場合、不定の主語“不少人(多くの人)”が目的語の位置に現れえることを示している。これは(15)で示すように、非対格動詞“醉(酔う)”や“醉倒(酔う-倒れる)”の場合と同様の振る舞いを見せる。

このように、中国語では本来非能格動詞である“哭(泣く)”などの動詞が主語の状態変化を表す結果述語と結びつくと、非対格動詞の特性をもつことが分かる。

3.2 使役化可能性

非対格性の診断テストとしてしばしば利用されているもののひとつに、使役起動交替(causative-inchoative alternation)がある(L&RH, 杨(1999), Huang(2006))。使役起動交替は、使役他動詞と非対格自動詞の交替現象で、英語と中国語では、以下で示すように、非

対格動詞“sink/沉”は、同形態で使役起動交替に参与するが、非能格動詞“cry/哭”は、それに対応する使役他動詞用法を持たず、使役起動交替に参与できない。

- (16) a. The boat sank.
a'. 船沉了。
'船が沈んだ.'
- b. They sank the boat.
b'. 水手们沉了船。
'水夫たちが船を沈めた.'
- (17) a. The boy cried.
a'. 小孩哭了。
'*子供が泣いた.'
- b * {We/This thing} cried the boy.
b'. * {我们/这件事} 哭了小孩。
'* {私たち/このことが} 子供を泣いた.'

(16bb')と(17bb')の文法性の対立は、内項をもつ非対格動詞は外項を追加する使役化が可能であるが、外項をもつ非能格動詞はさらに外項を追加する使役化が不可能であることを示していると言える。

しかし、中国語では非能格動詞が結果述語と結びつく場合、英語と異なり、それに対応する使役他動詞用法を持っており、使役起動交替に参与できる。

- (18) a. The river froze solid.
b. The change in weather the last few weeks froze the river solid.
'最後の数週間の気候の変化が川をカチカチに凍らせた。' -Huang(2006:10)
- (19) a. He cried *(himself) tired.
b. *This thing cried him tired.
'*このことが彼をクタクタに泣かした。' -Sybesma(1999:37)
- (20) a. 张三哭累了。
b. 这件事哭累了张三。
'このことが张三を泣き疲れさせた。' -Sybesma(1999:37)

(18)(19)で示したように、英語では非対格動詞“freeze”のみ使役起動交替に参与し、非能格動詞“cry”は結果述語“tired”を伴う場合も使役化できず、(19b)は非文となる。それに対して中国語では、非能格動詞“哭”が結果述語“累”と結びつくと、(20b)で示したように、使役化可能となる。

同様の現象は(21)(22)にも観察される。これは(23)で示すように、V1が非対格動詞である“醉倒(酔う-倒れる)”の場合と同様の振る舞いを見せる。

- (21) a. 张三哭醒了。
b. 一场恶梦醒了张三。
'一つの悪夢が张三を泣かして目覚めさせた。'
- ((7b)の再掲)
-Huang(2006:11)

- (22) a. 张三笑醒了。
 ‘張三が笑って目が覚めた。’
 b. 一场好梦笑醒了张三。
 ‘一つのいい夢が張三を笑わせて目覚めさせた。’
- (23) a. 张三醉倒了。 (V1: 非対格動詞) ((7a)の再掲)
 b. 那杯酒醉倒了张三。 — Cheng&Huang(1994:200)
 ‘あのお酒が張三を酔わせて倒れさせた。’

使役起動交替が使役他動詞と非対格自動詞の交替現象であるとする、使役起動交替に参与する(20a)(21a)(22a)のような自動詞文は、(23a)の場合同様、非対格構文であると考えられる。したがって、外項を追加する形での使役化が可能であると考えられる。

このように、「主語の動詞後置可能性」や「使役化可能性」の2つの非対格性テストに基づくと、中国語では非能格動詞が結果述語と結びつく場合、非対格動詞の特性をもつことが分かる。したがって、表面上、主語叙述を許す非能格動詞を含む結果構文は、V1が非対格動詞の場合と同様、結果述語が派生主語と叙述関係を結んでいる非対格構文と分析することができ、DORの反例にならないと考えられる。

4. 非能格動詞としての性質をもつ場合

本節ではまず、V1が非対格動詞の場合の結果構文との比較を通じて、非能格動詞が結果述語と結びつく場合も非能格動詞としての性質をもつことを、見せかけの目的語の生起に関する事実に基づいて示す。次に、表面上主語叙述を許す非能格動詞を含む結果構文は、(24)で示すように、結果述語が目的語の位置にあるゼロ代名詞と叙述関係を結んでおり、DORの反例にならないことを示す。

- (24) NP_i V1-V2 e_i ((11b)の再掲)

4.1 見せかけの目的語 (fake object)

英語と中国語では、(25ab)(26ab)で示すように、本来目的語を取らないはずの非能格自動詞は、これらの動詞によって厳密下位範疇化されない見せかけの目的語を伴って、見かけ上は他動詞的に振舞うことができる。それに対して非対格動詞の場合は、(27)で示すように、さらに内項を追加する形での他動詞化は不可能である。一方、日本語では(25c)(26c)で示すように、見せかけの目的語を伴う結果構は成立しない⁷。

⁷ 影山(1996:213)は日本語において見せかけの目的語を伴う結果構文が成立しないのは、格の問題ではなく、目的語が主動詞と整合しない(「*目を泣く」)ためであるとする。日本語では動詞が結果状態を内包する「本来的結果構文/弱結果構文」しか許されることが指摘されている(影山(1996,2001), Washio(1997))。

- (25) a. She cried *her eyes red*.
 b. 她哭红了眼睛。
 c. *彼女は目を赤く泣いた。
- (26) a. She ran *her sneakers ragged*.
 b. 她跑破了运动鞋。
 c. *彼女が運動靴をボロボロに走った。’
- (27) a. *The lake froze *the fish to death*.
 b. *湖水冻死了鱼。
 ‘湖が凍り付いて魚が死んだ。’

(25)の“her eyes/眼睛”や(26)の“her sneakers/运动鞋”が“*She cried her eyes/她哭了眼睛”や“*She ran her sneaker/她跑了运动鞋”と言えないことから、これらは動詞によって厳密下位範疇化されない見せかけの目的語であることが分かる。一方、(27)の“the fish/鱼”も“*The lake froze the fish/湖水冻了鱼”と言えないことから、動詞“freeze/冻”によって選択されない要素と考えられるが、このタイプの結果構文は英語と中国語では許されない。

自動詞は通例、目的語に格を付与できないため、「音形をもつ名詞句は、格を持たなければならぬ」という格フィルター(Chomsky 1981)により、排除されると思われるが、非能格動詞と非対格動詞では、(25ab)-(26ab)で示したように、見せかけの目的語の生起において異なる振る舞いを見せる。このような文法性の対立についてL&RHは、Burzio(1986)の提案した(28)のような一般化によって説明している。つまり、この一般化によれば、動詞“cry”や“run”は、外項をもつ非能格動詞のため、目的語に対格を付与することができ、よって格フィルターが満たされ、適格文になると考えられる。それに対して、動詞“freeze”は、内項しか持たない非対格動詞のため、目的語に対格を付与することができず、格フィルターにより排除されると考えられる。

(28) Burzioの一般化: 外項を取る動詞のみが、目的語に対格を付与することができる。

見せかけの目的語の生起において中国語が英語と同様の振る舞いを見せることから、(25b)(26b)と(27b)の文法性の対立もBurzioの一般化によって説明できると考えられる。

ここで、本稿で問題とする表面上主語叙述を許す結果構文に、内項と解釈される見せかけの目的語を生起させると、以下で示すように、V1が非能格動詞の場合は適格文となるが、非対格動詞の場合は、非文となることが分かる。

- (29) a. 张三哭醒了。 (V1: 非能格動詞) ((7b)の再掲)
 b. 张三哭醒了 {李四/自己}。
 ‘张三が泣いて {李四/自分} が目を覚ました。’

- (30) a. 张三咳醒了。 (V1: 非能格動詞)
 ‘張三が咳をして目が覚めた。’
 b. 张三咳醒了 {李四/自己}。
 ‘張三が咳をして {李四/自分} が目を覚ました。’
- (31) a. 张三醉倒了。 (V1: 非対格動詞) ((7a)の再掲)
 b. *张三醉倒了 {酒杯/李四/自己}。
 ‘張三が酔って {グラス/李四/自分} を倒した。’
- (32) a. 张三跌倒了。 (V1:非対格動詞)
 ‘張三が転んで倒れた。’
 b. *张三跌倒了 {花瓶/李四/自己}。
 ‘張三が転んで {花瓶/李四/自分} を倒した。’

内項と解釈される見せかけの目的語を生起させた(29b)(30b)が、格フィルターに抵触せず、適格文となるのは、“哭(泣く)”や“咳(咳をする)”が外項をもつ非能格動詞のためであると考えられる。この場合、結果述語の叙述対象はいずれも見せかけの目的語“李四/自己(李四/自分)”である。それに対して、内項と解釈される見せかけの目的語を生起させた(31b)(32b)が非文となるのは、“醉(酔う)”や“跌(転ぶ)”が内項をもつ非対格動詞のため、格フィルターにより排除されると考えられる。

上記の事実は、“哭(泣く)”“咳(咳をする)”などの動詞が結果述語と結びつく場合も非能格動詞の性質をもつことを示していると言える。そうすると、表面上主語叙述を許す(29a)(30a)はDORの反例と思われるが、本稿では(29b)(30b)で示したように、目的語の位置に主語と同一指示の再帰代名詞が生起可能となる事実に着目し、次の4.2節では、英語結果構文との比較を通じて、このような現象はDORの反例にならないことを示す。

4.2 DORとゼロ代名詞

英語の場合、以下で示すように、主語指向の非能格動詞に基づく結果構文はDORにより、排除されるが、目的語の位置に主語と同一指示の再帰代名詞を補うと適格文になる。

- (33) a. *He cried tired.
 b. He cried himselftired.

⁸ V1が非対格動詞でありながら内項を伴う以下のような文が成立するのは、(ib)のように主語が内項ではなくCauserの意味役割をもつ外項と解釈されるためであると考えられる。使役主となる要素は使役変化を引き起こす性質を備えていなければならないことが石村(2000)によって指摘されている。

- (i) 张三累死了李四。 <Causer, Theme> -Cheng&Huang(1994:203)
 a. *張三が疲れて李四が死んだ。
 b. 張三は、李四を疲れさせて死なせた。

- (34) a. **She* laughed silly.
 b. *She* laughed *herself* silly.

Simpson(1983)は、英語では結果述語で表わされる状態に変化する対象が既に主語位置にあるにもかかわらず、目的語の位置に再帰形として再度具現化されなければならないことを指摘し、この場合の“*himself, herself*”を見せかけの再帰目的語(fake reflexive object)と呼んでいる。英語の結果構文の成立にこの種の形式的操作が要求されるということ自体がDORの妥当性を示していると言える。

それに対して、中国語ではこの種の形式的操作が義務的ではないものの、以下で示すように、再帰代名詞“自己(自分)”を補うことも可能である。

- (35) a. 他哭累了(自己)⁹.
 ‘彼が泣いて(自分が)疲れた.’
 b. 张三哭醒了(自己)
 ‘張三が泣いて(自分が)目が覚めた.’
 c. 张三笑傻了(自己)
 ‘張三が笑いすぎて(自分が)わけがわからなくなった.’

ここで、もし中国語においても表面上主語叙述を許す結果構文に再帰代名詞の生起が可能であるとすると、なぜ英語では(33)(34)で示したように、再帰代名詞の生起が義務的となるのに対し、中国語では随意的となるのが問題となる。本稿では再帰代名詞の生起において英語と中国語に見られる違いは、ゼロ代名詞を許容するか否かという違いに還元できることを提案する。Huang(1984,1987)Xu(1986)徐(1994)¹⁰によって指摘されているように、中国語では英語と違って主語や目的語といった項が顕在化する必要がないのである。

- (36) a. 张三_i 批评过自己_i 吗。
 b. e 批评过 e. /他批评过e。
 ‘e e 批判したことがあるよ。/彼は e 批判したことがあるよ.’

- (37) a. Has Zhangsan_i criticized himself_i.
 b. *e has criticized e./*Zhangsan has criticized e. (cf. He has criticized himself.)

⁹ 表面上主語指向の結果構文に再帰代名詞が生起するデータは馬(1987)宋(2007)Lin(2004)にも見られる。宋(2007)は、再帰代名詞の生起に関わる事実を認知言語学の観点から考察し、再帰代名詞が目的語の位置に現れると強調ないし対比(対比焦点)の読みを伴うとする。詳細は宋(2007:149)を参照。

¹⁰ 目的語の空範疇の性質を巡ってHuang(1984,1987)とXu(1986)では議論が分かれており、再帰代名詞に対応する空要素の捉え方も両者は異なる。先行研究の論争に関しては崔(2006:注12)を参照。本稿では目的語の空範疇に関する議論には深く立入らず、再帰代名詞に対応する空要素を便宜上ゼロ代名詞と呼ぶことにする。

(36)と(37)の対比から分かるように、中国語では英語の“he/himself”に対応する代名詞が顕在化されなくても適格文となるのに対し、英語では常に音形のある代名詞で表現されなければならない。

中国語が英語と異なり、再帰代名詞の省略を許すことから、本稿では、V1が非能格動詞の場合、見かけ上主語と叙述関係を結び、DORの反例と見られる現象は、実は(24)で示したように、結果述語が目的語の位置にある主語と同一指示である音形を持たないゼロ代名詞と叙述関係を結んでおり、DORが満たされていると考える。

5. おわりに

本稿では、英語・日本語と異なり、表面上主語叙述を許す結果構文が中国語において成立するのは、非能格動詞が結果述語と結びつく場合、非対格動詞と非能格動詞の両方の可能性があることに起因すると主張し、それを非対格性のテスト(「不定主語の動詞後置可能性」「使役化可能性」)と見せかけの目的語の生起に関する経験的事実に基づいて示した。そして、非対格動詞の性質を持つ場合は、結果述語が派生主語と叙述関係を結んでおり、また、非能格動詞の性質を持つ場合は、結果述語が目的語の位置にあるゼロ代名詞と叙述関係を結ぶ他動詞構文であり、いずれの場合においてもDORの反例にならないことを主張した。

最後に本稿の主張と関連して残された問題について触れておきたい。まず、本稿の主張と関連して、英語の場合も非能格動詞が非対格動詞へのシフトを可能にする環境があることを指摘する。以下はL&RH¹¹によって指摘されている現象であるが、L&RHは、英語では本来非能格動詞である運動様態動作主動詞(agentive verbs of manner of motion)が結果的な位置を表す方向句を伴うと非対格動詞の特性をもつとし、これを再帰代名詞の生起が許されない(38a)のような事実や、また(39)で示すように、動詞“run”が使役起動交替に参与する事実に基づいて示している。特に、(38a)は、再帰代名詞の出現が義務的となる述語が結果状態を表す(38b)と対照的である。

¹¹ Rappaport Hovav & Levin(2001)では(38a)と(38b)における再帰代名詞の出没の相違に関しても事象構造に基づいて分析し、その違いを動詞の性質の曖昧性に求めない。彼らは結果構文における再帰代名詞の生起は文が表す事象構造の反映であると考えており、(38a)の場合、再帰代名詞の生起が不可能となるのは、「踊る」事象と「捕まえてから逃れる」事象が時間的に同時平行的に展開し、「捕まえてから逃れる」時点で踊る行為も終了するという一体化した事象を構成するためであるとする。一方、(38b)では、「踊る」事象と「疲れる」事象がそれぞれ時間的に独立した形で生じうるため、再帰代名詞の生起が義務的になるとする。つまり、彼らは、事象構造の相違が再帰代名詞の出没を決定する要因であると主張する。

しかし、Rappaport Hovav & Levin(2001)に従い、(38a)を非能格動詞の非対格動詞へのシフトを反映した現象でなくとも、動詞“run”が使役起動交替に参与する(39)のような事実は、非対格動詞のみ使役起動交替に参与する、というL&RHの分析に従えば、非対格動詞と見なさなければならないこととなる。またHuang(2006)は、オランダ語の場合も非能格動詞が非対格動詞の性質を併せ持つ環境があることを指摘し、それを主に助動詞選択と連動する再帰代名詞の出没に関する事実に基づいて示している。詳細はHuang(2006:22)を参照のこと。

- (38) a. She danced (*herselves) free of her captors. (方向を表す述語)
 b. She danced *(herself) tired. (結果状態を表す述語)
- (39) a. The mouse ran (through the maze).
 b. We ran the mouse *(through the maze).

このように、英語では非能格動詞が方向句を伴う場合、非対格動詞の特性をもつことが分かる。しかし、本稿の分析からすると、中国語では非能格動詞が結果状態を表す述語と結びつく場合も非対格動詞の性質をもっており、“他哭累了(He cried *(himself) tired)”のタイプの結果構文には2つの構文分析が可能となる。ではなぜ中国語では非能格動詞が結果状態を表す述語と結びつく場合、非対格動詞の性質をもつことができるのか。また、非能格動詞が結果述語と結びついた文には、すべて2つの構文分析が可能であるのか、そして可能であれば、動詞の曖昧性はどのように具現化され、区別されるのか、など解決すべき問題は多く、さらなる検討が必要であると思われる。

【参考文献】

- 石村広(2000)「中国語結果構文の意味構造とヴォイス」, 『中国語学』247: 142-157
- 加賀信広(2007)「結果構文と類型論パラメータ」『結果構文研究の新視点』177-215
- 影山太郎(1996) 『動詞意味論』 くろしお出版
- 影山太郎(2001)「結果構文」, 『動詞の意味と構文』154-181 大修館書店
- 崔玉花(2006)「中国語結果構文と直接目的語制約-英語・日本語結果構文との比較を通じて-」, 『筑波応用言語学研究』13: 99-112
- 马希文(1987)「与动结式动词有关的某些句式」, 『中国语文』第6期: 424-441
- 宋文辉(2007)『现代汉语动结式的认知研究』, 北京大学出版社
- 徐杰(2001)『普通语法规则与汉语语法现象』, 北京大学出版社
- 杨素英(1999)「从非宾格动词现象看语义与句法结构之间的关系」『当代语言学』第1期: 30-43
- 徐烈炯(1994)「与空语类有关的一些汉语语法现象」, 『中国语文』第5期: 321-329
- Burzio, Luigi(1986) *Italian Syntax: A Government and Binding Approach*. Reidel.
- Carrier Jill and Janet Randall(1992) “the Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives,” *Linguistic Inquiry* 23, 173-234.
- Cheng, Lisa Lai-shen and C.-T. James Huang(1994) “On the Argument Structure of Resultative Compounds,” in Matthew Chen and Ovid Tzeng (eds.) *In Honor of William S. Y. Wang: Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, 187-221. Pyramid Press, Taipei.

- Huang, C.T.J.(1984) "On the Distribution and Reference of Empty Pronouns," *Linguistic Inquiry* 15,531-74
- Huang, C.T.J.(1987) "Remarks on empty categories in Chinese," *Linguistic Inquiry* 18, 321-337
- Huang, C.T.J.(1987) Existential sentences in Chinese and (in)definiteness. In Eric J. Reuland and Alice G. B. ter Meulen (eds.) *The representation of (in)definiteness*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Huang, C.T.J.(2006) "Resultatives and Unaccusatives: a Parametric View," 『中国語学』 253 : 1-43
- Li, Ya-Fei(1990) "On V-V Compounds in Chinese," *Natural Language and Linguistic Theory* 8,177-207
- Lin, Jimmy(2004) *Event Structure and the Encoding of Arguments: The syntax of the Mandarin and English verb Phrase*. Doctoral dissertation, MIT
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav(1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
- Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin(2001) "An Event Structure Account of English Resultatives," *Language* 77, 766-797.
- Simpson, Jane(1983)"Resultatives,"in Lori Levin et. Al. (eds.), *Papers in Lexical-Funtional Grammar*,143-157. Indiana University Linguistics Club.
- Sybesma, Rint(1999) *The Mandarin VP*. Kluwer Academic Publishers.
- Takezawa, Koichi(1993) "Secondary Predication and the Goal/Locative Phrases," In *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, ed. Nobuko Hasegawa.45-77,Kurosio
- Washio, Ryuichi(1997) "Resultatives, Compositionality and Language Variation," *Journal of East Asian Linguistics* 6,1-49
- Xu, Liejiong(1986) "Free empty category," *Linguistic Inquiry* 17, 75-93